ソルフェージュ:明日のための教育法(3)

- 20世紀フランスのソルフェージュ 第2部-

テシュネ, ローラン 訳・関 根 敏 子

I フォルマシオン・ミュジカルに向かって

1977年の改革の一般的精神については、前稿 1 で取り上げた。改革の拠り所となったのは、以下の 2 つの認識である。

- (1) メトード・アクティヴ²は、それほど効果的ではなく、すぐ短命に終わり、実際の音楽 養成には至らなかった。
- (2) 伝統的なメトードは、音楽院の創設(19世紀)以来、教育の基礎とされてきたが、実際には効力がなかった。なぜなら、そこには音楽が欠けていたからである。

したがって改革は、新しい方向を提案した。

- ——直接的に楽器とは関係しない知識、体験、技法などの領域にわたる教育をできるだけ 幅広くおこなう:聴き取り/分析/形式/様式/楽典/音読/エクリチュール[訳注: 和声、対位法、フーガを紙に書く練習]/様式、背景、音楽体系[訳注:旋法、調性、 十二音技法など]の知識/即興/グループ歌唱/音楽的好奇心の発展など。
- ――これらの教育要素が、真の実作品を習得していくための源となるようにする。

この改革では、理論と実践が分離してはならないこと、そしてフォルマシオン・ミュジカルの教育が、いっそう積極的で一貫したものとなり、あらゆる科目の教授たちと協議して念入りに推敲された教育過程に含められねばならないという事実も強調された。

最後に、この改革においては、音楽実体験(感覚や記憶)が優先され、教育者たちがまず 実作品を利用し、純粋にソルフェージュ的な方式をさらに鋭いテクニック作業に取っておく ことが提案された。

その目的に達するために、文化省は3つの主要な措置を布告した。

- (1) メトード・アクティヴと特別ソルフェージュ教育の適性証書³の統合:フォルマシオン・ミュジカル適性証書
- (2) フォルマシオン・ミュジカルのプログラム作成 (内容と進度)。音楽家と教育者を集めたワーキング・グループにより執筆されたプログラムは、続いて各音楽教育機関において討議される。
- (3) 各地方における教育者のための予備講習と上級研修の実施(連続的な教育体系)

まもなくして、フランスに政治的大変動が起こった、すなわちフランス共和国大統領選挙の結果、1981年5月10日、フランソワ・ミッテラン⁴が大統領となり、社会主義政党となって新しい改革の適用と促進が奨励されたのである。新しい文化大臣ジャック・ラング⁵は、率先して音楽院と音楽学校を監査し、その機能障害を把握して、批判をまとめ、確実な知識と方向性を明示した。要するに、様々な催しを通じて「現状を分析」したのである。

- *<音楽会議Assises de la musique> (1981年12月)の開催。これは、次のように締めく くられている。音楽院は、若者の就職口や希望を無視して楽器ソリストの教育を優先し ており、学生は不均衡な教育を受けている。優れたテクニックを持っていても、音楽の 聴き取りécouteがあまり身についておらず、様式の知識もほとんど教えられていない。 これは、ソルフェージュ教育を2重に告発するものである。
- * < 音楽教育改革専門委員会報告Rapport du comité technique de réforme de l'enseignement musical > (1982年)の作成。これは、次のように厳格に記載されている。科目の極端な区分、教育的討議の不足、音楽感覚の探究を犠牲にしてテクニックの獲得だけにむけられた教育、レパートリーのあまりにも限られた利用(18・19世紀に固定、調性体系だけで独占)、音響意識の育成軽視(環境音への配慮)。この報告でも、ソルフェージュが非難されている。
- *<音楽学校の学生と卒業生に関する報告Rapport sur les élèves et anciens élèves des écoles de musique>(1985年)。アントワーヌ・エニオン 6 、フランソワーズ・マルティナ 7 、ジャン=ピエール・ヴィニョル 8 が執筆。ここでの結論も、ソルフェージュについて優しいものではない。この報告では、何よりもまず、大部分の生徒を失望させ落第させる選抜機能が残っていると非難する。
- * < カンヌ会議Colloque de Cannes > (1985年)の開催。ここでは、国際的な重要人物を 集めて、外国人との何らかのコミュニケーションを強調している。たとえばエドワード・ ヒギンボトム⁹は、厳密に言えば、あらゆる国がソルフェージュの特別教育をもっている とは限らないが、イギリスの音楽教育ではソルフェージュ学習の適切で効果的な別の戦略を発展させていると発表した。

このような行動すべてが、他の数多くの行動とともに、とりわけソルフェージュの伝統的な教育に「止めの一撃」とも言うべきものをもたらした。

Ⅱ フォルマシオン・ミュジカル:実践的側面

フォルマシオン・ミュジカルの教育では、講義の準備と継続のために、その使命をさらに拡大し、時間、エネルギー、想像力と創造の精神をいっそう活用しなければならない――実作品の正しい選択、抜粋部分の論理的な分割、不断の教育学的考察、多大な素材の準備、学生たちの声質と解釈の絶えまないコントロール、障壁を除去する気持ちで同僚全体に説明し率直に対話する配慮、等々。

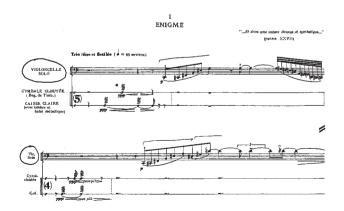
この改革の精神を説明しようと、多数の教育者たちが「講義例」を配布し、出版した。それらの目的は、同僚たちがそれぞれ独自の手段を探すよう励ますためであった。以下は、その例である。

ピエール・グルヴェル¹⁰は、『分析とフォルマシオン・ミュジカル研究 Cahiers d'analyse et de formation musicale』シリーズ¹¹において、アンリ・デュティーユ¹²のチェロとオーケストラのための協奏曲「遠い遠い世界」を使用する際に予想されるソルフェージュ的作業を示している。ここに、作品の理解に不可欠の音楽史と分析の要素の後に引用された短い抜粋をいくつか挙げておこう。

「第1楽章:謎」

1. 音符の音読lecture

(A) チェロのソロ([5] の冒頭)。リズムをつけて、あるいはリズムなしで。



例1. デュティーユDutilleux, Henri *Tout un monde lointain*. Paris: Hengel, 1974, p. 1.

(B) 変奏1と2に基づくグループ作業

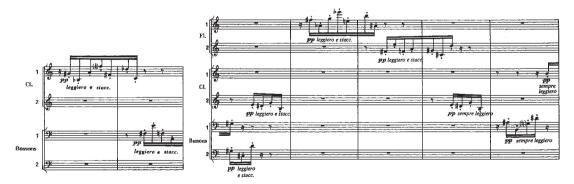


例2A. Tout un monde lointain. p. 11.

ソルフェージュ:明日のための教育法 (3)



例2B. グルヴェルGrouvel, Pierre Cahiers d'analyse et de formation musicale: Paris: Leduc, 1987, p. 4.



例3B. Cahiers d'analyse et de formation musicale. p. 4, 5.

(C) 移調楽器の場合、「リレー方式en relais」による音読 (書かれている音で、次に実際の音で読む)



例3A. Tout un monde lointain. p. 15.

2. 音程練習 intonation

(A) 主題C([9])、多様な呈示:



例4. Tout un monde lointain. p. 30.



例5. Cahiers d'analyse et de formation musicale. p. 5. 対位法練習(1/と2/を一緒に、2/と4/を一緒に)移調、記憶、リズムの考案などの練習

(B) 変奏 4 に基づく視唱 (29p)



例6. Tout un monde lointain. p. 29.



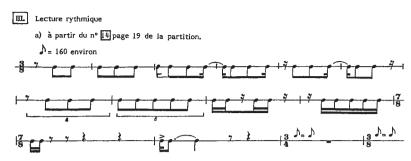
例7. Cahiers d'analyse et de formation musicale. p. 7.

3. リズム読み lecture rythmique

(a) [14] から (この部分のリズム聴音を取り出すこともできる)

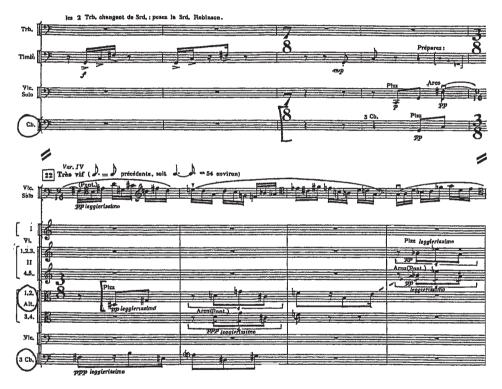


例8. Tout un monde lointain. p. 19.



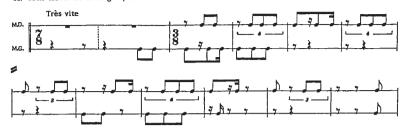
例9. Cahiers d'analyse et de formation musicale. p. 8.

(b) グループで、リズムを叩きながらあるいは演奏しながら読む、 もしくは一人で(左手+右手)、



例10. Tout un monde lointain. p. 29.

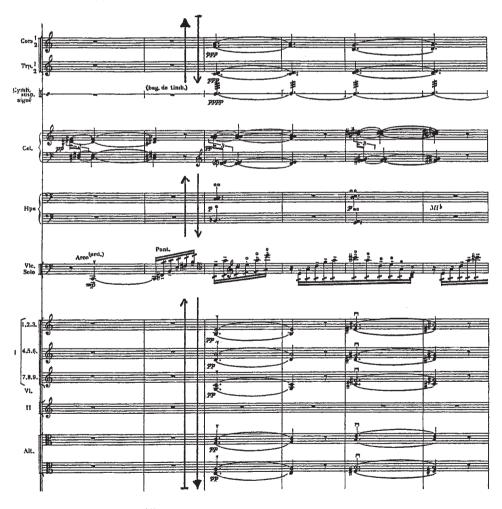
 b) Lecture rythmique sur la Var. IV - Lecture frappée ou jouée (On peut répartir le devoir suivant sur deux élèves ou deux groupes d'élèves.



例11. Cahiers d'analyse et de formation musicale. p. 9.

4. 和音読みlecture d'accords

(a) 垂直読み (下から上へ、その逆)

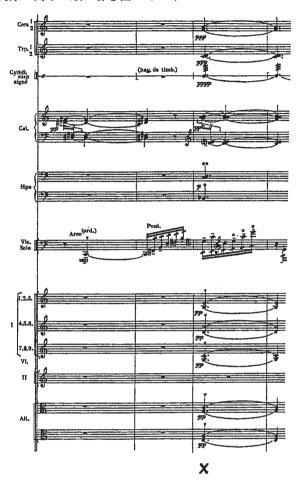


例12. Tout un monde lointain. p. 7.

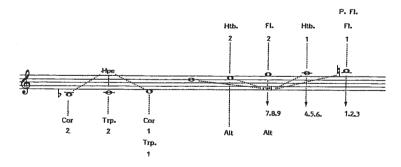


例13. Tout un monde lointain. p. 33.

(b) 和音書き、実際の高さの順に音を置いていく

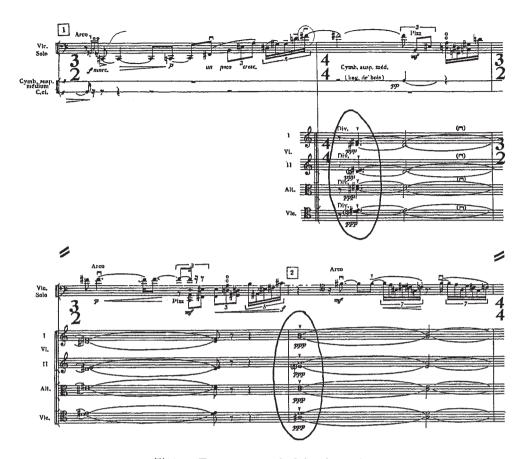


例14. Tout un monde lointain. p. 7.



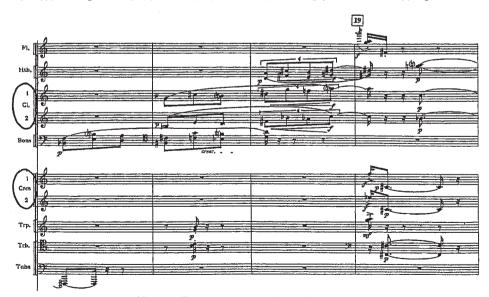
例15. Cahiers d'analyse et de formation musicale. p. 10.

(c) 和音視唱、旋律、垂直、倍音 (グループ)



例16. Tout un monde lointain. p. 2.

5. 移調書き [訳注:移調楽器で演奏された実際の音 (聞こえた音)を書く]



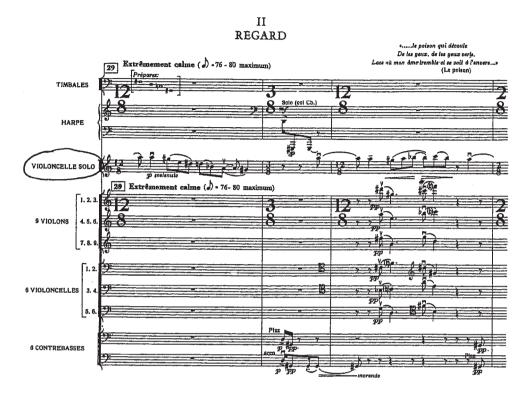
例17. Tout un monde lointain. p. 25.

6. 聴音

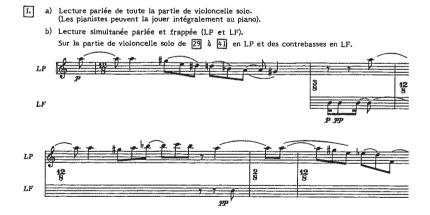


例18. Tout un monde lointain. p. 17.

その他にも様々な練習課題が、この作品の他の 4 楽章(まなざし/大波/鏡/讃歌)に基づく。



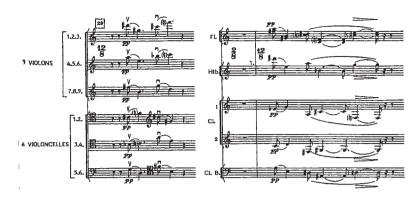
例19. Tout un monde lointain. p. 29.



例20. Cahiers d'analyse et de formation musicale. p. 11.

一聴音「間違い探しdépistage de fautes」、「書き忘れた音符oubli de notes」[訳注:楽譜に記されていない音符を書き入れる]など

ソルフェージュ:明日のための教育法(3)

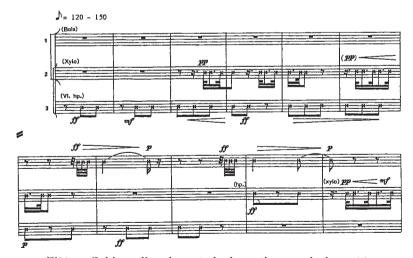


例21. Cahiers d'analyse et de formation musicale. p. 12.

- 複リズムによる練習課題



例22. Tout un monde lointain. p. 64.



例23. Cahiers d'analyse et de formation musicale. p. 16.

他の楽曲も含めたシリーズの序文で、アラン・ルヴィエ¹³は、学生にせよ専門家にせよ、作品の原典版を使用するよう推奨している¹⁴。また、録音も控えめであれば使用してよい。つまり、学生は楽譜を読むだけで、自分の「内的な耳」を開発せねばならないのである。

Ⅲ フォルマシオン・ミュジカルの優れた教育者:オデット・ガルテンローブ

伝統的なソルフェージュからフォルマシオン・ミュジカルへと「変容」する移行期には、 ひとりの教育者が必要であった。それがオデット・ガルテンローブ¹⁵である。

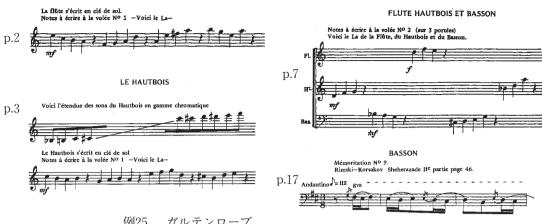
ガルテンローブは、ピアノをマルグリット・ロン¹⁶、ラザール=レヴィ¹⁷、イヴ・ナット¹⁸ に、作曲をオリヴィエ・メシアン¹⁹、ノエル=ギャロン²⁰、アンリ・ビュセール²¹、ダリウス・ミヨー²²に師事した。また音楽史をモーリス・エマニュエル²³、ルイ・ラロワ²⁴に学んでいる。協奏曲では、とりわけアンゲルブレシュト²⁵と共演した。その後、パリ国立高等音楽院(以下、パリ音楽院)のソルフェージュ、次いで初見、教育学、フォルマシオン・ミュジカルの教授に任命された。ガルテンローブは、ソルフェージュがそれだけで完結するものではなく、「真の音楽」で必要な基礎を学ぶ手段であると考えていた。

APFM²⁶の創設者で、芸術文学勲章受章者 (1989) であるガルテンローブのソルフェージュ関係の多数の出版物から、フランスにおける20世紀後半のソルフェージュ教育の教育学的発展を要約することができる。

聴音dictée musicale



例24. ガルテンローブGartenlaub, Odette 32 dictée atonale. Paris: Hortensia. 1981, p. 18.



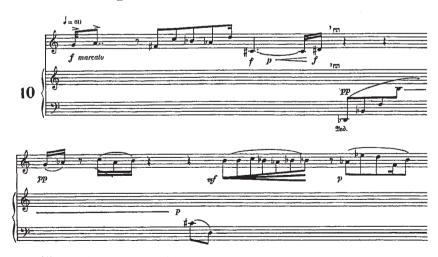
例25. ガルテンローブ

Dictée instrumentale. Paris: Chappell, 1982.



例26. ガルテンローブ Dictée à Parties manquantes. Paris: Hortensia, 1992.

歌唱ソルフェージュsolfège chanté



例27. ガルテンローブ Dix leçons à chanter. Paris: Rideau Rouge, 1978, p. 20.



例28. ガルテンローブ 16 leçons de solfège à chanter. Paris: Rideau Rouge, 1975, p. 18.



例29. ガルテンローブ Lectures d'auteurs à chanter. Paris: Hortensia, 1985, p. 6.

等々

これらの譜例から、フォルマシオン・ミュジカルの試験問題が発展して、実際に存在する 実作品を使用することになっていることが容易に注目できよう。

オデット・ガルテンローブの教育者としての活動は広範囲に及ぶ。他の教育者のフォルマ

シオン・ミュジカルの作品の出版(彼女の夫ベルナール・オルティエ²⁷が社長をつとめる音楽 出版社オルタンシアHortensia)、音楽家、教育者ばかりでなく、心理学者や医者までも招い て発表させた講習会や研究会の開催²⁸など。

Ⅳ 輝かしい教育組織:ブローニュ=ビヤンクール国立地方音楽院29

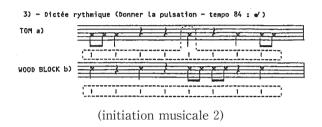
1975年以後、アンヌ・ル・フォレスティエ³⁰、ミシェル・ゴンザレス³¹その他数多くの精力的で有能なフォルマシオン・ミュジカルの教授たちのおかげで、ブローニュ国立地方音楽院は、いわば「教育の実験工房」の役割を果たし、ソルフェージュ教育と結びついた改革を試みていた。この状況について、院長のアラン・ルヴィエは以下のように述べている。

- 「一試験のために、あらゆる様式とあらゆる時代の実作品に由来するテキストの最大限の使用
 - 一作品/楽器/電子音楽の講義、導入、作品紹介[訳注:聴取、歴史背景、分析、楽器法 など]の時間での視聴覚資料の利用
 - ―教育シリーズの刊行。たとえば『歌うための音楽』(ルデュック社)
- 一毎年変更され、コンサート予定にできる限り関連した楽曲の年間プログラム作成 等々」

アラン・ルヴィエは、望ましいソルフェージュ能力の獲得に関する文化省の勧告を再び強調している。

- 一記憶の訓練L'étude de mémorisation 「訳注:聴覚と視覚の両方で記憶する]
- 一母音と旋律による表現L'expression vocale et mélodique [訳注:母音歌唱、ソロもしくは合唱で音高や音程などをつけて]
- 一音部記号とリズムの練習 L'étude de clés et des rythmes
- 一合唱Formation chorale
- 一即興Improvisation
- 一聴き取りAudition (聴音その他の訓練)
- 一楽曲の練習Étude d'oeuvres musicales
- 一音楽理論、分析、音楽史、楽器学の知識Notions de théorie, d'analyse musicale, d'histoire de la musique, d'organologie

フォルマシオン・ミュジカルには、器楽や声楽の実践に不可欠の伝統的な「ソルフェージュ」 が含まれる。 新しい教育理念の一貫性への絶えまない研究と普及への配慮から、ブローニュ国立地方音楽院は、フォルマシオン・ミュジカルの試験用テキストを毎年出版する。そこには、段階別の毎年の講義とプログラムが付けられている。以下は、筆記試験 [訳注:聴音、理論などを含む] のためのリズム聴音に関する実例である。



例30. ゴンザレスGonzales, Michèle、ル・フォルスティエLe Forestier, Anne、ルヴィエLouvier, Alain

Textes d'examen de formation musicale 1986. Paris: Leduc, 1988, p. 5.

3) - Dictée rythmique après mémorisation (Tempo d= 96) Poser le crayon, la phrase est jouée 3 fois; l'élève écrit ensuite.

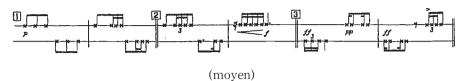


例31. Textes d'examen de formation musicale 1986. p. 7.



例32. Textes d'examen de formation musicale 1986. p. 13.

4) - Dictée rythmique



例33. Textes d'examen de formation musicale 1986. p. 17.

4) - RYTHME à reconstituer sur une mélodie donnée. Beethoven - 7ème Quatuor, thème joué par le 1er violon. Les notes de ce thème sont données sur la feuille d'examen. Le candidat doit noter le rythme, après 4 écoutes (sur disque). Le tempo est donné à la d = 56 ca

Cet extrait est cité dans son intégralité afin de le mieux situer, musicalement.



Version du candidat :



(fin d'études)

例34. Textes d'examen de formation musicale 1986. p. 27.

口述による記憶再現la mémorisation orale[訳注:聴いたものを記憶し、口頭で再現する] の実例



(initiation musicale 3)

例35A. Textes d'examen de formation musicale 1986. p. 11.



(initiation musicale 3)

例35B. Textes d'examen de formation musicale 1986. p 11.



(moven)

例36. Textes d'examen de formation musicale 1986. p. 24.

12) - MEMORISATION - TRANSPOSITION (vocales).



(fin d'étude)

例37. Textes d'examen de formation musicale 1986. p. 34.

Ⅴ パリ音楽院の場合(1984年から今日まで)

レイモン・ガロワ=モンブラン³²、マルク・ブルーズ³³ (1984-86)、アラン・ルヴィエ (1987-90)、クサヴィエ・ダラス³⁴ (1991-92)、マルク=オリヴィエ・デュパン³⁵ (1993-2000)、次いでアラン・ポワリエ³⁶ (2000-現在) が院長をつとめてきたパリ音楽院は、機能の根本的な変化をおこない、数多くの教育改革を始め、パリ19区 (ラ・ヴィレット) の音楽都市に移転することになる。

パリ音楽院におけるソルフェージュ教育に関しては、状況は複雑である。文化省の音楽局は特別ソルフェージュのクラスを徐々に終了させることを決定し、1986年クラスは最終的に閉じられた。その結果「ソルフェージュ」部門は少しずつ「弱体化し」、もはや副次的なものにすぎなくなった。というのも、器楽/声楽/舞踊の学生たちにとっては、必修科目のひとつでしかないからである。

その上、オデット・ガルテンローブがおこなっていたフォルマシオン・ミュジカルの教育 学講義は、後継者がいなかった。入学試験問題のレベルが低下した結果、明白な音楽的特質 をもちながら、きちんと一貫したソルフェージュ教育の恩恵をこうむる機会が得られなかっ た志望者にも大きく道が開かれた。

ソルフェージュ:明日のための教育法(3)

B1 - Dictée à 1 puis 2 voix Donner le ton et l'indication de mesure ; donner les notes-repères entourées



パリ音楽院 入学試験問題2002-2003 例38.

B2 - Dictée d'accords de 3 et 4 sons



例39. パリ音楽院 入学試験問題2002-2003

B3 - Dictée d'un fragment non tonal

Alban Berg - "Lyrische Suite"



例40. パリ音楽院 入学試験問題2002-2003

B4 - Reconnaissance de tonalités et cadences Jouer chaque fragment trois fois, dans le tempo. Donner le la avant chaque écoute



例41. パリ音楽院 入学試験問題2002-2003

8

Cente lecture peut être réalisée avec ou sans le nom des notes (clé de lecture au choix), avec ou sans battue. Le jury évaluera non seulement la précision rythmique mais aussi le respect du phrasé et du sens musical du texte.

This sightreading aloud may be done with or without the names of the notes (using the clef of your choice), with or without beating time.

The jury will evaluate not only rhythmical precision but also phrasing and the musical meaning of the excerpt.



パリ音楽院 入学試験問題2002-2003 例42.

Tandis que tout sommeille SÉRÉNADE



例43. パリ音楽院 入学試験問題2002-2003

ひとたびパリ音楽院に入学すると、入学試験問題で非常によい結果をとれなかった学生は、 3つの教育部門に分けられたフォルマシオン・ミュジカルのクラスに出なければならない。

- (1) ト音記号とへ音記号による視唱。音読/音高/リズム/強弱/フレージング/様式
- (2) リズム視唱
- (3) 書き取り(「耳で」)。ここには聴音、終止と調性の認識、コラールの再構成[訳注:コ ラールを弾き、配布楽譜の間違いを訂正し(間違い探し)、欠けている声部を補筆する(不

足声部の聴音)]。

教授陣としては、モニク・ブヴェ³⁷、テレーズ・ブルネ³⁸、ニコル・ペリバ³⁹、マルティーヌ・デゼナール⁴⁰、カトリーヌ・ブリエー⁴¹、ロズリネ・マセ=ルコック⁴²、イザベル・アブルケル⁴³、クリスティーヌ・オジェ⁴⁴、コラリ・フェイヨル⁴⁵などを挙げておこう。

Ⅵ フォルマシオン・ミュジカルの新しい出版物

フォルマシオン・ミュジカルの出版シリーズ(初級から始まりソルフェージュ上級まで)については、何よりもまず以下のものを挙げなければならない。ジャン=マルク・アレルム⁴⁶ 『F.M.440.8に基づくソルフェージュDu Solfēge sur la F.M.440.8』(Ed.Billaudot, Paris, 1994)、ジャン=クレマン・ジョレ⁴⁷ 『リズムの練習……音部記号の練習Jeux de rythme...Jeux de clés』(Ed.Billaudot, Paris, 1987)、フランシス・ポール・ドゥミヤック⁴⁸ 『楽曲を用いた音楽理論La Théorie musicale par la pratique des textes』(Ed.Hortensia, Paris, 1983)、リュカスーファンタピエーシュッカリ⁴⁹ 『フォルマシオン・ミュジカル講義Cours de formation musicale』(Ed.Billaudot, Paris, 1988)、その他にも、マルグリト・ラブルス⁵⁰、セルジュ・ルキュサン⁵¹、クサヴィエ・ジヴレ⁵²、ジャン=ピエール・クロー⁵³、ミシェル・メリオとアラン・トリュショ⁵⁴、ミシェル・ヴェルニョー⁵⁵、ロベール・スベイラン⁵⁶をはじめ、まだまだ多数の著作がある!

さらに、ソルフェージュの参考書の新刊にも注目せねばならない。

- ー『ダンドロの実践マニュアル、フォルマシオン・ミュジカルの目的に従ってブリュノ・ジネ⁵⁷とアルメル・ショカール⁵⁸が改訂増補した新版Le Manuel pratique de Dandelot, Nouvelle Edition revue et augmentée par Bruno Giner et Armelle Choquard selon les objectifs de la formation musicale』(Ed. Eschig, Paris, 1999)。
- 『ダンノーゼルの音楽理論、ジュヌヴィエーヴ・ダラス⁵⁹とフレデリク・デュリユー⁶⁰監修、 多数のフォルマシオン・ミュジカル教授陣による改訂増補版La théorie de la musique de Danhauser, édition revue et augmentée sous la direction de Genevieve Darras et Frédéric Durieux avec un collectif important de professeurs de formation musicale』 (Ed. Lemoine, Paris, 1996)

最後に、新しい音楽理論書を挙げておかねばならない。とりわけ以下のものがある。

-ジャック・カステレード⁶¹『音楽理論 *Theorie de la musique*』(Ed. Billaudot, Paris,

1999).

ークロード・アブロモン⁶²『音楽理論便覧*Guide de la théorie de la musique*』(Ed. Fayard/ Lemoine, Paris, 2001)

注

- 1 拙稿「ソルフェージュ:明日のための教育法(2)-20世紀フランスのソルフェージュ 第1部-」(東京藝術大学音楽学部紀要、第31集、2005、p.113-139)(訳: 関根敏子) p.133参照。
- 2 前掲論文、p.124参照。
- 3 音楽教育の適性証書(ピアノ/フォルマシオン、ミュジカルなど)は文化省から交付される。
- 4 François Mittérand (1916-96) 弁護士、政治家、1981~95年に共和国大統領。
- 5 Jack Lang (1939生) フランスの政治家、文化人。
- 6 Antoine Hennion (1952生) フランスの社会学者。
- 7 Françoise Martinat (1955生) リール第2大学にて政治学博士号取得。
- 8 Jean-Pierre Vignolle (1945生) フランスの社会学者、鉱山技師。
- 9 Edward Higginbottom (1947生) イギリスの指揮者、オルガニスト。
- 10 Pierre Grouvel (1948生) ブローニュ国立地方音楽院のフォルマシオン・ミュジカル教授。
- 11 『分析とフォルマシオン・ミュジカル研究Cahiers d'analyse et de formation musicale』(Ed. Leduc, Paris, 1987)。
- 12 Henri Dutilleux (1916生) フランスの作曲家、1938年ローマ賞受賞。
- 13 Alain Louvier (1945生) フランスの作曲家、1968年ローマ賞最高位受賞。
- 14 Editions Heugel, Paris, 1974.
- 15 Odette Gartenlaub、拙稿「ソルフェージュ:明日のための教育法(2) —20世紀フランスのソルフェージュ 第 1 部 」p.129参照。
- 16 Marguerite Long (1878-1966) フランスのピアニスト、パリ音楽院教授、ロン=ティボー国際音楽コンクールの設立者 (1943)。
- 17 Lazare-Lévy、拙稿「ソルフェージュ:明日のための教育法(2)—20世紀フランスのソルフェージュ 第1部一」p.119参照。
- 18 Yves Nat (1890-1956) フランスのピアニスト、パリ音楽院教授。
- 19 Olivier Messiaen (1908-92) フランスの作曲家、オルガニスト、パリ音楽院教授。
- 20 Noël-Gallon、拙稿「ソルフェージュ:明日のための教育法 (2) —20世紀フランスのソルフェージュ 第1部—」p.117参照。
- 21 Henri Büsser (1972-1924) フランスのオルガニスト、指揮者、作曲家。

ソルフェージュ:明日のための教育法(3)

- 22 Darius Milhaud (1892-1974) フランスの作曲家、六人組のひとり、パリ音楽院教授。
- 23 Maurice Emmanuel (1862-1938) フランスの作曲家、音楽学者。
- 24 Louis Laloy (1874-1944) フランスの音楽学者。
- 25 Désiré-Émile Inghelbrecht (1880-1965) フランスの指揮者、作曲家。
- 26 フォルマシオン・ミュジカル教授連合 (Association des Professeurs Formation Musicale)
- 27 Bernard Haultier (1927-2002) フランスの指揮者、ヴァイオリン奏者、クラリネット奏者、作曲家。
- 28 招待された科学者の中には、聴覚障害を専門とする医学博士トマティス博士 (1920生) がいた。
- 29 Le conservatoire national de région de Boulogne-Billancourt
- 30 Anne le Forestier (1943生) ブローニュ国立地方音楽院フォルマシオン・ミュジカル教授。
- 31 Michèle Gonzales (1952生) ブローニュ国立地方音楽院フォルマシオン・ミュジカル教授。
- 32 Raymond Gallois-Montbrun、拙稿「ソルフェージュ:明日のための教育法(2)―20世紀フランスのソルフェージュ 第1部―」p.130参照。
- 33 Marc Bleuse、拙稿「ソルフェージュ:明日のための教育法(2)—20世紀フランスのソルフェージュ 第1部—」p.133参照。
- 34 Xavier Darasse (1934-92) フランスの作曲家、オルガニスト。
- 35 Marc-Olivier Dupin (1953生) フランスの作曲家、指揮者。
- 36 Alain Poirier (1954生) フランスの音楽学者、作家。
- 37 Monique Bouvet (1954生) フランスのピアニスト。
- 38 Thérèse Brenet、拙稿「ソルフェージュ:明日のための教育法(2)―20世紀フランスのソルフェージュ 第1部―」p.138参照。
- 39 Nicole Philiba (1946生) フランスの作曲家。
- 40 Martine Desaynard (1947生) フランスの作曲家、教育者。
- 41 Catherine Brière (1951生) フランスの理論家、教育者。
- 42 Roselyne Masset-Lecocq (1950生) フランスの作曲家。
- 43 Isabelle Aboulker (1938生) フランスの作曲家。
- 44 Christine Auger(1952生)フランスのクラヴシニスト、教育者。
- 45 Coralie Fayolle (1957生) フランスの作曲家、指揮者。
- 46 Jean-Marc Allerme (1951生) フランスの作曲家、教育者。
- 47 Jean-Clément Jollet (1948生) フランスの作曲家、教育者。
- 48 Francis Paul Demillac(1917生)フランスのヴァイオリン奏者、作曲家、指揮者。
- 49 Marie-Luce Lucas (1935生) フランスの教育者、女性作曲家。Henri-Claude Fantapié (1938生) フランスの指揮者、教育者、作曲家、音楽学者。Dia Succari (1938生) シリアの作曲家、教育者。

- 50 Marguerite Labrousse (1949生) フランスの教育者、女性作曲家。
- 51 Serge Lecussant (1950生) フランスの作曲家、教育者。パリ音楽院でトニー・オーバンTony Aubinに師事。
- 52 Xavier Givelet (1952生) フランスの教育者、作曲家。
- 53 Jean-Pierre Couleau (1948生) フランスの教育者、作曲家。
- 54 Michel Mériot (1935生) フランスの作曲家、教育者。Alain Truchot (1942生) フランスの作曲家、教育者。
- 55 Michel Vergnault (1943生) フランスの教育者、作曲家。
- 56 Robert Soubeyran (1946生) フランスの作曲家、教育者。
- 57 Brune Giner (1960生) フランスの作曲家、教育者。イヴォ・マレクIvo Malec、ブライアン・ファーニホーBrian Ferneyhoughに師事。
- 58 Armelle Choquard (1967生) フランスのクラヴシニスト、オルガニスト。
- 59 Geneviève Darras (1928生) フランスの教育者。クレテイユ国立地方音楽院教授、マラコフ市立音楽院院長。
- 60 Frédéric Durieux (1959生) フランスの作曲家、教育者。ベッツィ・ジョラスBetsy Jolasとイヴォ・マレクに師事。
- 61 Jacques Castérède、拙稿「ソルフェージュ:明日のための教育法(2)—20世紀フランスのソルフェージュ 第1部—」p.138参照。
- 62 Claude Abromont (1964生) パリ音楽院とパリ・エコール・ノルマル卒業。パリ音楽院アナリーゼ教授。

Le Solfège: Quel enseignement pour demain? (3)

Laurent TEYCHENEY

Le directeur du CNSMDP, Alain Poirier, le confirmait l'an dernier lors de son séjour à

Tokyo, destiné à reserrer les liens Geidai/Conservatoire de Paris : les étudiants japonais qui

vont se perfectionner en europe possèdent déjà de sérieuses notions solfégiques dans leur très

grande majorité, il faut donc avant tout en féliciter les professeurs des universités musicales

nippones qui font honneur, par la qualité de leur enseignement, aux structures dans lesquelles

ils exercent un métier passionnant, difficile et accaparant.

L'objet premier de mes modestes recherches ayant pour propos l'historique de l'enseignement

solfège en France et en Europe, publiées annuellement depuis 1997 par les Universités

musicales Showa puis Geidai, est d'inviter à la réflexion sur des méthodes d'apprentissage non

plus tant calquées sur le savoir faire européen, mais réellement adaptées à nos étudiants

japonais, étudiants qui aspirent, non seulement à l'assimilation des notions élémentaires de la

musique, mais aussi à des espaces d'expression et de liberté musicales plus largement

artistiques : improvisation (solfège intérieur!), collaboration avec leurs collègues des Beaux

Arts, performances individuelles et collectives, actions culturelles avec impact médiatique pour

aller vers une société toujours plus ouverte et généreuse.

j'aime le solfège!

-173-